



第44号
 令和8年3月8日
 発行
 熊本市北区
 高平 2-20-35
 曹宗 浄国寺
 編集者
 中山 義昭



令和八年 春季彼岸会法要 3月24日(火)11時。 本年も縮小して、開催致します。

彼岸法要は、昨年と同様の形での実施と致します。コロナ騒動前は参詣者は百名を越す事もありましたが、現在は、かなり減っています。過密な環境を避けるため今回も50名までの受付とします。お詣りを希望される方は、お寺まで申込みの電話を入れて下さい(096-344-7614 先着順)。

国が音頭をとる形で、日常生活から社会環境まで変えてしまったコロナ騒動。今となつては、一緒にと言うより率先して騒いでいたマスクも黙りを決め込んでいます。これからは、報道に踊らされずに自衛するしかないのかも知れません。テレビの報道には気をつけていきたいものです。

お詣りに来られる方は

この寺報を見て、参加しようと思われる方は、お電話ください。その際、名前は姓だけでなく全とお伝え下さい(同姓の方が結構いらつしゃいます)。一世帯あたりの参加人数も教えてください。先着順

供養だけはして欲しい方は

「行きたいけど、当日都合がつかない。体調が良くないし移動手段もない」という方は、同様にお電話ください。その際、できれば供養を希望されるご先祖様の お名前を伝えて頂くと読込ができます。ご持参いただいても、郵送、振込でも構いません。法要当日に間に合わなくても、ご連絡戴ければ読み込んで供養を致します。

法要には、近隣の方丈様方がコロナ騒動の前のように、十数名集まって法要を厳修します。年に2回くらいは、お寺に足を運

んで貰い、ご先祖様の供養をする気持ちをお大切にしたいと考えています。参加人数の制限を設けましたが、「ご先祖様がいたから、今、自分がここにいる」この意識は、持つている必要があると思います。電話の手間はありますが、何卒、ご理解頂きます様お願い致します。

再びお彼岸を考える

以前も書きましたが、「お彼岸」とは読みの通り「彼の岸」向こう岸」です。どこの向こう側かと言えば、我々が今住んでいる「此の世界」の向こう岸です。そして、我々の住む世界は、娑婆(シヤバ)忍土と訳されます)と呼ぶ苦しみの世界です。そして、苦しみから解放された世界が涅槃(ニルヴァーナ)の音訳)と言います。「辛さ、苦しみのない仏様方の心静かな世界」を意味しています。

涅槃経の教え

お釈迦様の教えでは「一切衆生悉有仏性」全ての人が仏様なんだと説いています。ところが、キリスト教などの一神教と大きく異なる所です。一神教では、人は神が作った物であり、人は決して神にはなれません。しかし、仏教は、人は最初から仏様であり、貪瞋癡が産み出す煩惱によつて、

自らの仏性に気付く事ができないだけです。しかし、肉体が生み出す様々な欲望や煩惱から解放されて、葬儀の場で、導師から仏様方に沢山の功德を積んで生きてきたこの方を、どうか涅槃に連れて行ってください（これを「引導を渡す」と言います）とお願ひして、故人は仏様として涅槃へ旅立たれたのです。つまり、故人は「先祖様は、仏になり（成仏）彼岸から見守って下さっています。その事に気づき、感謝の気持ちを持つ事、これが彼岸の法要です。」

仏教と日本人

一神教の国と仏教国では、先祖に対する考え方が大きく異なります。一神教（欧米など）では、人が生きていくのは神様との個人契約に基づいています。仏教では、全てが因と縁と果という関係性から成り立っていると考えます。つまり今ここに自分が居るといふ現実、環境や人間関係という縁があり、自分が存在する果になつていふという考え方は、だから親兄弟、家族を大切にすると、更に遡った因であるご先祖を大切にすることを考え方が日本社会に根付いてきた様に



更に遡った因であるご先祖を大切にすることを考え方が日本社会に根付いてきた様に

思われます。また、それ故に日本人は、和を大切にしてきたし、自己主張より人との関係性を大事にする国民性を持つていました。しかし、戦後八〇年の歴史の中で、感覚まで欧米化が進み和より益（利益）になったようです。

供養って何？

私は、個人的には「ご先祖様に喜んで貰う事、これが供養だと思つて見守つています。仏様として見守つていられるご先祖様が喜ぶのは子孫であるあなたが幸せに生きていく姿を故人に見て貰う事だと思つて見守つて、これが一番の供養だと思つて見守つています。では、子孫が幸せに生きていく姿とは何でしょうか？お金持ちになる事？人より偉くなる事？それも一つの形かも知れません。しかし、何より自分が多くの人と共に、今この時を生きているんだと言つて実感を持つて過ごす事ではないでしょうか？自分の命を実感できる事ではないでしょうか？親子の縁に感謝する、他人との関係性（お陰）に感謝する、だからこそ自分の命を大切に生きていく

そして、その自分を見守つてくれている先祖に対して感謝と敬意を持つ。この事こそが供養では無いでしょうか？
「家」の定義が益々小さくなつていきます。一緒に暮らす親子だけが、家族になつてきました。しかし、一世代の親子だけで我々の命が存在している訳ではない事を忘れてはならないと思つて見守つて、連続と続く関係性の中で、今の私は命を貰つて、生きていくのです。

令和八年 浄国寺予定
四月二十九日（水）午後二時
松本喜二郎 墓前祭
喜二郎翁 追憶供養
谷汲観音供養
七月三日（水）午前十一時
施餓鬼会法要
お盆壇信徒先祖総供養
十一月三日（水）午後五時
「いま 心ZEN」
仏教講演会
併設企画「お寺でジャズ」七時
鈴木良雄 (b) & The blend

定例本曜坐禅会

毎週木曜日 午後八時より
当山本堂にて

一炷（約四十分）坐禅をして、仏教や禅の著述に関する話（約二十分）。今は道元禅師の「普勸坐禅儀」の話。会費会則一切なし、初めてのの方はご連絡下さい。

身辺雑記

昨年、私は学校法人 浄国学園の理事長の職を降りました（園長は、暫く務めますが）。初代の理事長としての先代住職から遷化後に私が引き継いで、学園のオーナーを続けていきました。現在、住職に加え宗務所長という重職、更に幼稚園の理事長というは体力的にも年齢的にもかなりの負担になっていました。しかし、私学である幼稚園から託児所としての認定こども園に変わった事が最も大きな理由です。子どもの成長より、母親を経済効果の労働力として捉え、その為には母子分離政策を進めるといふ国の政策方針に正直嫌気がさしたのも事実です。女性であっても仕事にかけている方もおられます。しかし、子どもとの時間を大切にしたいと思つても生活の為にパートであつても働かざるを得ない方が大半です。労働内容の質を無視して、労働力として人間の量の増加させ、正当化理由として少子高齢化を掲げる愚かさを感じます。子どもも成長を蔑ろにしていると、労働力の質は下がります。それより先に現在の場合たり政策では、誰も子どもを作らないし、少子化は進むだけでしょう。全てを個人単位に細分化すれば、短期的には効率的に見えますが、人間関係の処理能力が低下すれば長期的には発展は望めません。一部の富裕層の為に多くの労働者を働かせる、全てを縁ではなく貨幣に換算する、そんなグローバルリストの為に我々が生きる社会が歪になつてくるのは、もう嫌です。